

『エルクウ・キラール』

著作 ash

この作品は『痕』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.2）を元にした創作です。

∞ 1、下心（したごころ…かねてから心に期すること。わるだくみ）

その日、俺は一旦自分のアパートに戻り、最低限必要な片付けだけをすますと、そのまま大学に向かった。講義を受けるためではなく、退学の届出を出すために。

俺が大学をやめる理由は、ひとえにあの家に行く…いや、帰るためであってそれ以外は何もない。あえて言うなら家庭の事情だろう。

正直な話今までの学費だって、お袋の実家に負担してもらったとばかり思ってたのが、実は親父が出していたんだし、その親父もいなくなって、本当にお袋の実家に面倒見てもらうわけにも行かない。

苦学生と言う状況でもないが、そうまでして大学にこだわる理由も今の俺にはないし、元々勉強がしたくて入ったわけじゃないからな。

そうは言っても、何とも言いようのない寂しさを感じてるのも事実で、久しぶりに大学の門をくぐった時に、郷愁めいたものを感じてしまった。

学食に行っては皆と騒ぎながら食うだけの食事をとって、ばか騒ぎしてた頃が妙に懐か

しい。

多分俺にはもう二度とないだろう。

エルクウの俺にはもう…そんな大学なんて必要ないのだから…。

……。

……………。

駄目だな…。

いくらエルクウだろうが何だろうが、楽しみはなくちゃな。

そもそも俺はそんな事でシリアスに悩む柄じゃないし。

…などと、考え事をしながら廊下を歩いていると、

「柏木君！」

ふと誰かに呼び止められた。

声が出た方に振り向くと、そこには小出由美子さんがいた。いたと言うよりこっちに向

かって走っているのが正しいか。

「どうしたの？ 由美子さん」

俺は体を向き直して、由美子さんに尋ねた。すると、肩で息をしながら彼女は俺に聞き

返してきた。

「ど、どうしたの…じゃないわよ。ねえ、大学やめるって本当なの？」

「うん、本当だよ。今日はそのために来たんだ」

と言いながら俺は、学生課に提出する書類を入れた封筒を出して見せる。

「そうかあ、やっぱり本当なんだ…。夏休みが終わってもゼミで姿を見掛けないから、ど

うしちゃったのかなって気になってたんだけどね」

そう言った由美子さんの表情は少し寂しそうだった。本音を言えば、俺も寂しいのは変わりない。だからこそ、誰にも会わずにすませたかった。

「ごめん。何か余計な心配させたみたいだね」

「あら？ 心配なんて。ただ、せっかく話が合いそうだったのに、残念だなっ思ってるだけよ」

「…本当にごめん。でも、しょうがないんだ」

「家庭の事情ってやつ？」

「え？」

「だって、柏木君って、九月にお父様が亡くなられたんでしょ？ わたしが隆山温泉にいた時はそんな事知らなかったんだけど、休みが明けてから友達に聞いたの」

親父の死…それは確かに俺の生活を大きく変えるきっかけだった。ただ、親父が死んだのは、正確には九月じゃなくて八月なんだけど…。

「まあ、それも理由の一つには違ういんだけどね。ただ、俺がこっちの大学にいても何の支えにもなれないからね…」

「ふーん…」

由美子さんはちょっと不思議そうに小首をかしげている。そりゃそうだ。俺の言った理由なんて、彼女にはさっぱり見当がつくはずもないのだから。

それでも、彼女はしげしげと俺を見つめて、言った。

「何だか…確かに柏木君、変わったよなね…」

「変わった？」

「うん。何て言うかな？ 遅くなったって言うのかな？ とにかくすぐく大人になったみたい」

俺は由美子さんの言葉にかすかに心の中で苦笑いをしていた。変わったと言えば変わったに決まってる。だって、俺は「鬼」なんだから。

「何だか複雑だね。俺は喜んでいいのかな？」

「あははっ、そうよね。あ、でも別に以前の柏木君が情けないって意味じゃないから安心してね。ただね…」

「ただ？」

由美子さんは一旦言葉を切ると、手を口に当てながら小さ目の声で続けた。

「ちよつと遅かったかな…なんて思ってる…」

「遅かったって、何が？」

俺は当然とも言える質問を由美子さんに見たが、彼女は両手を大きく振って、

「もぉー、それ以上は追求なし！」

と、笑ってはぐらかすだけで、質問には答えてくれなかった。

俺には由美子さんが何を言いたかったのかよく分からなかったが、彼女がもう追求して欲しくないと言うならおとなしく従った方がいいに違いない。

「分かったよ、それじゃもう追求しないよ」

「そう、ありがとう、柏木君。ところで、今日は忙しいの？」

「ん？ そうでもないよ。これを出すだけで、あとは自宅の片づけをやり始めるくらい

で」

「それじゃあ、少し付き合ってくれない？」

「いいけど？」

「せっかく会えたんだから、ささやかながら送別……うん、壮行会でもやろうよ」

「ええ？ そりゃ大袈裟だよ、由美子さん」

「最後なんだから、それくらい付き合っただけいいな」

「う……」

女性にそうまで言われて遠慮するのは失礼と言うものだ。まあ、大学の友人にはあっちに落ち着いてから連絡をしようと思ってたのが、省けていいか。

「……まあ、いいか」

俺が了解した途端に由美子さんは、にこにこしながら言った。

「やった！ それじゃさっそく行こう」

「え？ 他の人たちは？」

「いーの。柏木君だつてあまり大袈裟じゃない方がいいんじゃないでしょうか？」

「え？ え？」

「それじゃ、さつさと用事を済ませてきてね。わたし待ってるから」

どうやら俺は今まで、由美子さんがどういう人か全然分かってなかったらしい……。だが、そんな彼女の態度に少し戸惑いながらも、俺はそれを不快には感じてない。まあ、普通の男であれば、当たり前だ。

俺はさつさと用事を済ませ、由美子さんとの楽しいひとときを過ごすべく大学を後にし

た。

その後は、由美子さんと食事をして、軽く酒を飲むつもりで行き付けの店に行った。その間の彼女との会話と言えば、あの時以来の「鬼の伝説」の話がずっと続いていた。

俺自身もその話に興味があったし、そんな俺の気持ちを汲み取ってか、由美子さんも色々と話してくれた。彼女は何かにつけ凝り性などところがあるらしく、旅行から戻った後も日本各地に伝わる鬼の話を調べていたらしい。

「でも、やっぱりあそこの伝説だけは、他のとちよっと違うのよね…」

雨月山の鬼の伝説を指して言った言葉が、俺の胸に突き刺さる。

だって、それは伝説でもおとぎ話でもなく、現実の話なのだから。何より俺自身がそれを体験している。

この俺の力が。

この体に流れる血が。

「その伝説の鬼って奴は、こんな奴なんだよ」と言いながら、由美子さんの目の前で変身したら、彼女はどんな風に思うだろう？　なんて事を考えながら、彼女の話に相づちを打っては、適当に注文した日本酒を飲む。

「よく飲むね、柏木君」

「ん？　そうかなあ？　まだ全然飲んだつもりはないんだけど」

「酔っ払いのセリフね、それって」

「ははは、任せなさいって！」

何となく気分がいい。何だか知らないが、この酒はうまい！　ま、この店はおいしいお

酒を出してくれるんで有名な所だけど。

「…すっかり出来上がってるわね」

「そんな事はない！ …ところで今何時？」

「九時過ぎってところかな？」

はて？ そう言えば誰かと九時ごろ約束してたような気もするんだけど…。

「ねえ、俺って誰かと約束してたっけ？」

由美子さんに尋ねてみたが、彼女は笑いながら答えてくれた。

「やだあ、わたしが知ってる訳ないでしょう？ それにね、こうして女性といるのに、他の約束の話はないんじゃないかな？」

「ちょっと由美子さんは怒ってるようだ。やれやれ、これだから女性は困る。」

「あはは、ごめんね、由美子さん。由美子さんという時にそんなやばな事言ってるようじゃ、おれもまだまだね」

「ねえ？ 本当に大丈夫なの？」

「だいじょぶだつて！ あれ？ ことばがぜんぶひらがなになってるう」

「もう飲むのやめた方がいいんじゃないかな？」

「そんなことないって！ うん、このさけ、うまいよ。なんていうなまえなの？」

へんだな。いつもはもつとのんでもへいきなのに。

このさけ、ちよつとちがうのかな？

えーっと、めいがらはつと……おにごろし……鬼ごろし……鬼殺しい？

「し、しまったああああ……」

『エルクウ・キラール§1～4』

そう言いながら、ふいに立ち上がったのが災いしたのか、そのまま俺の視界は急速に暗転して行った…。そんな中、遠くに由美子さんともう一人の女性の声を聞いたような気がしていた…。

そうか、そう言えば約束してたんだっけ…。

九時にこっちに来るって…。

∞ 2、勘違い（かんちがい：間違っと思ひ込むこと）

客間で俺が荷物の整理をしていると、ふいに初音ちゃんが入ってきた。その表情はどこか寂しそうだ。

「耕一お兄ちゃん：帰っちゃうって聞いたけど本当なんだね…」

俺の傍らにあつたバッグを見て、初音ちゃんがポツリとつぶやいた。

…何かオーバーだなあ…。

「初音ちゃん？ ちょっとオーバーなんじゃ…わっ！」

俺が言ったのと同時に、突然彼女が俺の胸に飛び込んできた。

い、一体これは…。

「耕一お兄ちゃんが帰っちゃうなんて分かったのに、分かったのにね…」

初音ちゃん…。

思わず俺は初音ちゃんの髪の上に優しく手を置いて、

「何言ってるんだよ、初音ちゃん…」

と、そのまま優しく髪を撫でる。

「お兄ちゃん…」

うーん、可愛い。

このままギュッと抱きしめてしまいたいくらいだ。いや、もう体勢はそうなっているか…。

「初音ちゃん…」

.....

っと、浸りきってる場合じゃない。よく考えれば、やっぱり初音ちゃんの様子がおかしいじゃないか。

「あの、初音ちゃん。俺が帰るって誰から聞いたの？」

「え？ あ、梓お姉ちゃんからだよ」

梓のヤツめ…。

純真な初音ちゃんをからかうとは…許せん！

…と、梓を怒鳴りつける前に、初音ちゃんにはちゃんと説明しておいた方がよさそうだな。

「あ、あのね、初音ちゃん。俺あつちに戻るの、大学とかアパートとかの諸事を片づけるために行くんであつてさあ…」

「え？ そ、それって？」

きよとんとした表情で俺を見つめる初音ちゃん。ま、そんなところも可愛くて好きなのだ。

「そお。またここに帰るの」

「それじゃあ…」

「そ、梓にからかわれたんだな、初音ちゃんは」

「なあーんだ、よかったあ」

俺は一瞬だけ「梓お姉ちゃんたら、ひどい！」とか言うかと思っただけど、やはり初音ちゃんはそんな子ではなかった。

「はは、初音ちゃんは寛大だね」

俺が笑って言うと、初音ちゃんも笑いながら、

「だって、お兄ちゃんがいなくなるのに比べたら、どうだっていいもの」

とあっさりと言ってくれるのだった。が、言った後で自分の言葉に照れを感じたらしく、

「そ、それじゃ、わたしはやる事があるから…」

と言ってそそくさと去って行った。

やれやれ。

そんな事を言われた方も嬉しいけど、結構恥ずかしいぞ、初音ちゃん。

だが、それはさて置き、問題は梓だ。

純真な初音ちゃんの気持ちを弄ぶなんて…鬼のようなヤツだな。ま、鬼には違いないけど。

俺は梓に文句を言うべく、ヤツの部屋に向かった。

そして部屋の前に行くなり、ノックもせずにドアを思いっきり開け放ち、同時に怒鳴り

つけ……

「ぎゃあああああ！」

え？

悲鳴？

…誰の？

すっかり氣勢をそがれた俺が、改めて部屋の中を見ると、そこには顔を真っ赤に染めた千鶴さんの姿があった。

「え？　ち、千鶴さん？　な、何で？」

「こ、こ、こ……」

声を詰まらせながら、千鶴さんは何かを言いたげだ。で、その時俺はようやく気が付いた。着替えでもしていたのか、下着姿と言う千鶴さんの格好に…。

「耕一さんっ！」

千鶴さんはそう叫びながら、腕を大きく振っている。

そして、ヒュッと何かが飛ぶような音がしたと思ったら、衝撃とともに突然俺の目の前が真っ暗になった。

…な、何で、千鶴さんが梓の部屋で着替えてるんだ…。

いや、部屋を間違ったか？

などと、瞬きするほどわずかな間に俺は考えていたが、その結論はよく分からないまま何も聞こえなくなっていくた…。

3、錯綜（さくそう）：複雑に入り組むこと。入りまじること）

気が付くと、朝だった。

あれ？ 俺はいつの間に寝たんだろう……痛っ！

な、何だ、妙に頭が痛い……。酒を飲んだ後の頭痛とも違うけどな……。

よく思い出せない……。昨夜何があったんだっけ？

……。

……。

……。

……。

……そうか、そうだった。

俺は梓の部屋に行ったんだ。そしたら、そこに千鶴さんがいて……。

って事はあの後、ずっと気絶していたのか？

一体どうして……梓の部屋に千鶴さんが？

と、布団から上体だけを起こして、あれこれ考えていると、ふと障子越しに声がした。

「……あ、あの……耕一さん、起きてますか？」

千鶴さんだ。

何だか入りづらそうに障子越しに俺の様子をうかがってるみたいだ。

無理もないか。昨夜のような事があったんだからな……。

……いや、待てよ？

この場合見られた千鶴さんより、そんな事をしてしまった俺の方が立場が悪いんじゃないか？

急に罪悪感にさいなまれた俺は思わず、障子越しの千鶴さんに向かって謝ることにした。「ち、千鶴さん、昨日はその…ご、ごめんなさい！」

どんな反応が返ってくるか予想できなかったが、まずは謝っておくに越したことはない。「いえ、違うんです。耕一さんが悪いんじゃないです、あれは…」

え？ 俺は悪くない？

って事はやっぱりあれは梓の部屋だったのか？

なあ〜んだ、それじゃあれは不可抗力だったんだ…。

「あの時、ちゃんと鍵を締めておかなかったわたしが悪いんですから…」

え？

なに？

「…まさかいきなり耕一さんが入ってくるとは思わなかったし……。もし分かってたら、ちゃんと支度を…。いやっ、何言ってるのかしら、わたし…」

障子越しの千鶴さんの照れた様子が手に取るように分かったが、それどころではない。

つまり？

俺が部屋を間違つて、千鶴さんの着替えを覗いたと言う事になる…。

え？

そ、そんな恥ずかしい事をしてしまったのか、俺は？

…まあ、ちよつとは得したが…。って、そんな事よりも！

「ち、千鶴さんっ！ あれは間違えたんだよ、部屋を！」

「間違い？」

「そそそそそう！ 梓の部屋に行くつもりだったんだ！」

「……梓の部屋……ですか……」

「……ぞくうっ！」

何だろう……心なしか寒いような……

……待てよ？

今の俺の弁解だと……「本当は千鶴さんじゃなくて梓をノゾクつもりだったんだよ
」って言ってるようなもんじゃないか？

「そうですか……。わたしの部屋には間違っって入ったんですか……。本当は梓の部屋に行く
つもりだったんですね……」

千鶴さんの冷たい口調……

これは間違いなく誤解してるような……

「違うんだってば、千鶴さん。梓が初音ちゃんを騙してたから、それを怒鳴りつけようと
思ってたんだよ」

「ええっ！ 耕一さんって、初音も騙してたんですか！」

……千鶴さん、そんなお約束のボケはやめてくれ。」

「違う違う、違うんだよ。」

もはや事態は泥沼化する一方だ。

「耕一さんってそんな人だったんですね……」

そんな人って、どんな人なんだよお…。

ああああ、誰でもいいからこの場を何とかしてくれえ！

とそこにまた誰かが来てくれたらしい。よかった、天はまだ俺を見捨ててはいなかった…。

「何やってんだよ、千鶴姉…」

…梓だった。

ここにあの天使のような初音ちゃんが現れてくれたら、言う事はなかったのだが、俺の心境はまさに天国から地獄に落とされたようなものだった。

「何って…梓…」

「耕一を起こしに来たんだろ？ 何トロトロやってんの？」

「…え、でも耕一さんが…」

「いーから、ほら千鶴姉は行った行った！」

「え？ でも…」

どうやら梓はそこから千鶴さんを動かしてくれたようだ。嘘みたいだが、梓に助けられた…と言う事になるのか。

これじゃあ昨日の初音ちゃんの件は帳消しにするしかないか…。

俺がほっとしていると、梓が障子をガラッと開けた。

とりあえず梓に礼を言っておこう。そう思って俺が言おうとする前に、梓が開口一番に告げる。

「よお、痴漢ヤロー！」

うっ…いきなりこれか…。

やっぱりこいつに礼を言う必要はないな…。

「いやあ、昨夜は惜しかったねえ。何で千鶴姉の部屋に押し入ったりしたんだろうねえ？」

ピクッ…。

「あははは、それにしても、耕一って単純すぎるよね」

こ、こいつ、もしかして…。

「お、おい梓…。」

「何だよ、痴漢ヤロー」

「ぐっ…、お前まさか、何か小細工していないか？」

「何の事？」

そ、そうか…。いくら何でもこいつが小細工なんかする訳はないか。

「いや、いいんだ。それにしても、初音ちゃんに何言ったんだ？」

「ああ、それかい？ 耕一が帰るよって言っただけで…嘘は言っていないよ」

初音ちゃんがどんな行動をするのか知っていないながら、わざと正確には言わなかったのは見え見えだな。

ちくしょう！

こいつのそんな無責任な言葉のおかげで、俺は…。

「お、お前のせいで俺はな！」

「部屋間違えたのは耕一でしょ？ あたしのせいじゃないよ」

「う……」

何も返す言葉がない…。

「でも確かに三枚目のドアを確認したつもりだったのに…」

俺がぼつりともらすと、梓は含み笑いをしながら言うのだった。

「くくっ、あんたって本当にバカだねえ」

「な、何でだよ？」

「やっぱり気が付かなかったんだね」

「なに？ ドアの枚数で数えて三枚目がお前の部屋だろう？」

「バカ。あの時、あんたがあたしの部屋と想ってた場所から先にドアがあった？」

…そ、そう言われてみれば、先は壁だったような…。

「……まさか」

「くー、もう駄目え、あーっはっはっはっ……」

もう笑いをこらえ切れずに思い切り大声で笑い出す梓。

こ、コノヤロー、本当に小細工しやがったのか！

「初音の部屋の前に壁と同じ模様の紙を垂らしてただけなのに…そんな事にも気付かずに千鶴姉の部屋に勇んで入って行ったってワケ！」

ピキーン！

さっきから我慢していた俺の怒りは、もはや最高に達して、それを抑える事はできそうになかった。

「あ、梓あゝ」

「おお、恐い」

コノヤロー…って、いかんいかん。エルクウの本能が出てしまいそうだ。

「梓、いいかげんにしろよ」

正直俺もそう言うのがやっとなった。

「悪い悪い。ただ最近千鶴姉がつまらなそうだったから、ちょっとね」

と言っつて、手を合わせる梓。

「え？ 千鶴さん、何かあったのか？」

俺が聞くと、梓はやれやれと言った表情をして答えた。

「…これだから、鈍い男は困るよねえ…」

何の事だ？

ま、それはともかく、何だか急に気が抜けてしまった…。

「ほら、さっさと朝メシ食べなよ。そうでないと片付かないし、あんただってそんなに暇じゃないんですよ、今日はさ」

ま、そりゃそうだ。

「そうだな。梓のバカ笑いを見てたら、何だか怒る気も失せたしな」

「何よ、それ」

「どうでもいいだろ。俺もすぐに起きるから、先に行つてろよ」

「フン！ 二度寝するなよ、痴漢ヤロー！」

する訳ないだろ。

朝からこんなに焦ったり怒ったりしてて…なんか疲れた…。

「ふうう…」

心なしかため息も重たい気がする。

が、いつまでもこうしている訳に行かないので、俺は起き出して、さっさと着替えて居間へと向かった。

居間に入ると、そこには…

「…おはようございます、耕一さん」

珍しく楓ちゃんの姿があった。

「おはよう、楓ちゃん」

初音ちゃんと梓は台所の方にいるみたいだ。

俺が食卓につくと、楓ちゃんがうつむきながら、小さな声でそつと言う。

「…あの、耕一さん…」

「ん？ 何？」

と、俺が聞き返したが、楓ちゃんは何か言いにくそうにしている。

「え……。そ、その……」

一体どうしたんだろう？

いつもとちよつと違うような…。

まさか楓ちゃんも初音ちゃんと同じように誤解してるとか？ いや、それはないって。

「何かあったの？」

「いえ…そんな訳じゃ……」

相変わらず会話が煮え切らないな。

それにしても…千鶴さんがこの場にいらなくてよかったな。

さっきの雰囲気だと、どんな顔で会ったらいかが分からないからな。

「…あの耕一さん…。千鶴姉さんを襲ったって……」

へ？

「あの、楓ちゃん？」

「は、はい…」

「…今、何て、言ったの、かな？」

「え…」

俺が聞き返すと、楓ちゃんは顔を赤らめてうつむいてしまった。

俺が千鶴さんを襲っただって？

誰がそんな事を？

「何やってんの？」

と、そこに梓と初音ちゃんがやってきた。

「今日はみんな一緒だね」

と初音ちゃん。

そうか、まだそんな時間だったのか。

「あれ？ 楓お姉ちゃんどうしたの？」

「……」

初音ちゃんに聞かれて、楓ちゃんはただ頭を横に振っただけ。そりゃ、確かに言いにくい事だろうな。

とりあえずは一番疑わしいヤツから問いただすとしよう。

「ところで、梓。お前余計な事を楓ちゃんに言わなかったか？」

「ん？ 余計な事って何さ？ 大体楓とはいま会ったばかりだよ」

うーん、こいつが嘘をついてる可能性も否定できないが、さっきの今で、そんな事をするほどこいやみなヤツじゃない。

すると、初音ちゃん？

「ねえ、初音ちゃん？」

俺が呼ぶと初音ちゃんはその天使のような無邪気な笑みで、俺に聞き返してくるのだ。た。

「なあに？ 耕一お兄ちゃん」

うー駄目だ、純真な笑顔が眩しいッ、眩しすぎるぜツ！

この子がそんな事をする訳がない。

一瞬でも初音ちゃんを疑った俺が馬鹿だった。

「い、いや、何でもないよ」

「変なお兄ちゃん」

クスツと笑う初音ちゃん。いや、本当にごめん、俺が悪かった。

とすると、誰が楓ちゃんに…。

俺がすーっと視線を楓ちゃんに向けると、楓ちゃんも俺の方を見ていたらしく、慌てて俺から視線をそらす。

そんなしぐさがまたたまらなく愛しいのだが、このままでは事態は一向に好転しない。

「そう言えば、千鶴お姉ちゃんはどうしちゃったのかな？」

初音ちゃんは何気なく言っただけなんだろうが、その言葉で俺と楓ちゃんは一瞬硬直した。

そうか。

楓ちゃんに話したのは…千鶴さんと言う可能性もあるな。

さっきの様子だと思い切り誤解してるようだったから、さぞかしとんでもない話が出たに違いない。

これは…まずい。

「どうせ千鶴姉は朝は食べないだろうから、いいよ」

「そうかな？ ちょっと呼んでくるね」

あ…。

初音ちゃん、君って子は…。

この時ばかりは、初音ちゃんを恨めしく思った。

そんな俺の心中を見透かすように、梓が笑いながら言うのだった。

「耕一、大丈夫だって！ ちゃんとあたしが言っておいたからさあ」

「え？ そんなじゃ、ちゃんと分かってくれたのか？」

「ああ、大丈夫だよ。ただ、千鶴姉の事だから、恥ずかしくって出てこれないんじゃないの？」

と、いかにも楽しそうに話す梓。

そりゃ、お前は見てて楽しいだろうが、その当事者の身にもなってみろ。

「おいおい、それでいいのか？」

と、俺が梓に言い返した時、その場にいながら一人だけ浮いてた…いや沈んでた楓ちゃんがぼつりと言った。

「…やっぱり何かあったんですね…」

「ち、違うよ、楓ちゃん！」

「そーそー。ただ耕一が千鶴姉の部屋に間違っって入って、着替えを覗いただけだから、大した事ないって」

「お、おい、梓！」

「それが本当の事じゃない」

確かにそうだが、物には言い方ってものがある。

「…間違っって入って？」

楓ちゃんはきょんとした表情で、梓に聞き返したが、梓はそれの答えを何も考えずに「うん、ホントはあたしの部屋に来るつもりだったんだ」

と言ったのだった。

その瞬間だった。

ほんのわずかではあるが、楓ちゃんの眉根がびくりと動いたのだ。そして、

「…そう…」

とだけ言うと、それ以降は何も言わずにまたうつむいてしまった。

これは楓ちゃんも誤解してるに違いない。

千鶴さんと言い、楓ちゃんと言い、どうしてこうなるんだろう…。考えてみれば初音

ちゃんも梓の嘘にころっと騙されたりしてるしな。

要するにこの三姉妹はそれだけ人がいいって事だな。それにひきかえ：

「何？ あたしの顔に何か付いてる？」

こいつだけはどうも毛色が違う。きつと、何があっても凶太く生きられるんだろうな、梓は。

「いや、別に…。さて、それじゃメシにするか」

とにかく今は余計な事ばかりに気を回してもしょうがない。

千鶴さんと楓ちゃんの誤解は、後でちゃんと話をすればいいだろう。二人とも思い込みが強いから、ちよつと苦労するかも知れないが。

俺が食べ始めようとした時、初音ちゃんが戻ってきた。

「千鶴お姉ちゃんは後でいいって」

：やっぱり、顔を会わせづらいらいだろうな、千鶴さんも。ま、後で何とかすればいいか。こうして、千鶴さん抜きのお食卓でみんなが朝食を食べていると、ふらりと居間にやってきた影があった。

誰と言うまでもなく千鶴さんだ。

「あ、千鶴お姉ちゃん、先に食べちゃってるよ」

「千鶴姉は相変わらずダイエツト中なんだろう？」

初音ちゃんと梓が千鶴さんに声を掛けたが、楓ちゃんはちらつと千鶴さんの方を見ただけだった。

俺は：ちよつと声を掛けづらい気もしたが、そんな事を言つてはこの先が思いやられ

る。

少々大袈裟な気もするが、意を決して千鶴さんに声を掛ける事にした。

「ち、千鶴さん、たまには一緒に食べようよ」

…少しどもってしまっただが、まあこんなもんだらう。

が、千鶴さんの反応はいつもと違っていた。

「耕一さん！」

千鶴さんは突然真面目な顔で、俺の名前を呼ぶと、俺の真正面のいつもの位置に座った。

「は、はい、何でしょうか！」

俺も思わず丁寧に答えてしまう。滑稽なやりとりには違いないのだが、不思議な事に誰

も笑ってなかった。

それもそのはずだ。

あの千鶴さんが、えらく真剣なまなざしで俺をじっと見つめている。それはにらんで

と言つてもいいくらいの迫力で、周りの空気をひんやりとさせるには十分すぎた。

誰もが千鶴さんの一挙手一投足に全神経を集中させていると、千鶴さんがゆつくりと落

ち着いた口調で語り始めた。

「わたし、決めました」

誰も「何を？」と聞き返さない。まだ千鶴さんの語りは終わってないのだから。

「やっぱり耕一さん一人だと頼りないので、わたしも今日があつちに行く事にします」

何？

何でいきなりそんな話になるんだ？

「耕一さんはわたしが思ってたよりも、そそっかしくて危なっかしくて一人じゃ何もできない人です。だから、わたしも一緒に行つて、片付けとか事務処理をやりますから」

そそっかしい？

危なっかしい？

いやあ、千鶴さんにそう言われるとは……まさに心外だった。が、千鶴さんは続けて言った。

「昨日だってあんな事をするし……」

うぐう、それを言われると何も言えない自分がくやし。

それにしても一緒に行くとなると、先に部屋の片付けがある程度やつておかないとな。

散らかしっぱなしの状態を見せたら、何を言われるか……。まあ千鶴さんと一緒に行くのも悪くはないけどな。

などと考えていると、ふいに初音ちゃんが突拍子もない事を言い出した。

「わたしも一緒に行きたいな。一度くらいお兄ちゃん部屋の部屋つて見てみたいし」
げっ！

「そうだね、それならあたしも行ってみたいな」

げげっ！ 梓のやつめ、調子に乗りやがって！

「……そうですね」

げげげっ！ か、楓ちゃんまで……。

「それじゃ、みんなで行きましょう！」

げげげっ！

な、何で、そうなるの……。

「ちよ、ちよっと待ってくれよ……。みんなは学校や仕事があるだろう？」

「一日くらい休んだって平気だよ、耕一お兄ちゃん」

ああああ、初音ちゃん……。今の君が悪魔にすら見えてきたよ……。

「そうだね、別に困るもんじゃないし、いいじゃないの、耕一」

駄目だ、流れはどうも俺の意志を無視した方向に進んでいる。何とかそれを止めねば。

「俺一人でできる……いや、一人の方がやりやすいから……」

俺が何気なく言うと、千鶴さんが突然表情を硬くして、言い放った。

「……一人で何するんですか？」

……………。

……次の瞬間、みんなが来る事に決まってしまった……。

だが、そこは俺も引き下がってはばかりではない。朝から同行するのではなく夜に向こうに来るように何とか話を進めて行ったのだ。

もともと、その裏にあるのは、(千鶴さんも行く)と決めたとは言え)実際には何もかも自分勝手には動けない身であると言う事で、俺の説得と言うよりは、みんなの社会的モラルと言う物の存在が大きい。

……立場が逆だったら、俺は平然と自主休講するのに……。これも伯父さんと親父の教育の賜物だろう。

みんなが出発するのは早くて昼ごろ、遅くて夕方くらいになりそうなので俺の方としても都合がいい。

とりあえず、夜に一回俺の部屋に来る事にして、泊りは近くのホテルにすればいいだろう。と、提案したら、初音ちゃんが、

「お兄ちゃんのとこに泊まれないの？」

と、これまた嬉しいような恐いような事を言ってくれたが、そもそも、俺の部屋に五人も泊まれやしないのだから、それはどうにか説得した。

こうして「九時に最寄りの駅で会いましょう」と言う約束を千鶴さんとしたのだが、それを思い出したのは……由美子さんと酒を飲んで、前後不覚になった時だった……。

∞ 4、羅刹（らせつ：悪鬼。足が速く大力で、人を魅惑あるいは食らう）

俺が急いで駅に向かうと、そこには誰もいなかった。いや、人はいるが、四姉妹の姿はなかった。

そりゃそうだ。

もう約束の時間はとうに過ぎてるんだから、いなくても当たり前だ。たぶん一度ホテルの方にも行ってるんだらう。

そして、俺がホテルの方に行こうとした時、さっきまで誰もいなかった場所にぽつんと人影が現れた。

誰だろうか。背格好からすると女性のようだが、こちらからは街灯の逆光で顔までは判別できない。ただ、どうやら俺の方を見ているらしい。

もしかしたら千鶴さんかも知れない。

そう思って俺はその人影に近づこうとした。

すると、その人影がゆっくりと動いて、

「…耕一さん…、遅かったですね…」

と、ゆっくりとしゃべった。

その声は紛れもなく千鶴さんのものだったが、俺は背筋に冷たいものを感じてしまった。どうしたんだらう、千鶴さん。

「…ずっと、待ってたのに…。何であなたは他の女の人と楽しくお酒なんか飲んでるんですか？」

な、何でそんな事まで知ってるんだ？

「あなたがずっと来ないものだから…ほら、暇つぶしに狩りをしちゃいました」

千鶴さんはそう言うと、その手を街灯のもとにさらしてみせた。彼女の瞳は妖しい光を放ち、手は鮮やかな紅色に染まっていた。それが何を意味するのか分からない俺じゃない。だが、そんな光景は見たいと思うものじゃあない。

「ち、千鶴さん！」

「あなたがいけないですよ、ちゃんと約束守らないから…」
何てこった！

いくら俺が来ないからって、そんな事をするなんて…。

こうなったら、俺が千鶴さんを止めるしかない！

「千鶴さん、俺も本気出すよ？」

「あら、耕一さん…、そんな事言ってる、わたしたちに勝てると思ってるんですか？」

「わたし…たち？」

俺がその言葉を繰り返した瞬間、千鶴さんの周りに三つの人影が現れた。

「そんな…。梓はともかく、初音ちゃんや楓ちゃんまで…」

「何であたしだけ『ともかく』なんだよ！」

…いちいちうるさい奴だな、梓は。と、今はそんな場合じゃない。

何だかよく分からないが、千鶴さんも梓も本気で俺にかかってきそうな雰囲気だった。

「ちょっと待っててくれよ！ 梓はともかく、俺はみんなとはこんな事したくはないんだか

ら」

何とかみんなを止めようとしたのだが、誰も聞く耳持たないようだ。そればかりか、

「だからあ！ 何であたしだけ『ともかく』なんだ…よっ！」

と叫びながら、梓が突進して来るじゃないか。そして、続けてその長い足を大きく振り…俺の横腹へ。

俺はそれをかわしたつもりだった。エルクウとしての俺の能力なら、それをかわせると思った。

だが、そうはいかなかった。

俺の見切りよりもはるかに素早く、梓の蹴りは見事に決まった。

これはまずい。

このままでは先にやられてしまうかも知れないな。と思ってる割には、何故か俺の方は能力が発揮できずにいた。いや、まるで発揮できない訳じゃないらしく梓の蹴りを食らっても結構平気だった。単に攻撃能力が皆無に等しい状態らしい。

ここはひとまず逃げよう。

そう決めた俺は梓と間合いを取って、逃げ出すタイミングを計っていた。

だが、千鶴さんが冷たく言う。

「耕一さん、逃がしませんよ」

じよ、冗談じゃない！ いくら何でもみんなとやりあうなんて、俺にはできやしない。

俺は間合いも何も忘れて、ひとまず走り出した。

しかし、俺の行く手は楓ちゃんと初音ちゃんにふさがれてしまった。

「楓ちゃん、初音ちゃん。二人は分かってくれるだろう？」

嘆願するように言うと、初音ちゃんは天使のような笑みで答えてくれた。

よかった…、この子たちはまともだ…。

「そうか、分かってくれるんだよね？ それじゃ梓と千鶴さんを止めてくれないかな？」

俺は安心して、半ばため息混じりに二人に向かって言った時だった。

楓ちゃんと初音ちゃんは、それぞれ俺の腕にしがみついたと思ったら、

「うん、耕一お兄ちゃんは約束守らなかったから、お仕置きしなくちゃね」

と言うのと同時に、俺の腕をしっかりと掴んできた。ふと気づくと楓ちゃんも初音ちゃんの言葉にコクリとうなづいて、俺の腕を掴んでいる。

「な、二人とも分かってくれたんじゃあ…」

「だって、耕一お兄ちゃんが悪いんだよ」

「…そうです」

げげっ、あの天使の笑みに騙されたのか…俺は。

…それにしても、この二人の力がやけに強く、掴まれた直後から何とか抜けようと試みてるのだけど、どうしても抜けない。

この二人にこんな力があつたとは、まさに予想外だった。

「耕一…手間取らすんじゃないよ」

「そうですよ、耕一さん。あなたがいけないんですよ」

「……耕一さん…」

「耕一お兄ちゃん、もう覚悟決めようよ、ね」

……もう駄目だ。

鬼と化したこの従姉妹たちに俺は……。

「それじゃ、行きますよ、耕一さん……」

ああ、千鶴さんの手が……。

……。

……。

「……ん」

ん……。

「……わ……ん」

……何だ……。

「かしわ……く……」

……誰か呼んでる……。

「かしわぎくん！」

……誰だろう……。

「柏木君ったら！」

どうして呼ばれてるんだろう？

「柏木君！ 大丈夫なの？ ねえ、起きてったら！」

起きろ？ はて？ 何で起きにやいけないんだ？

あれ？ それにこの声って……聞き覚えがあるな。

確か、ゆみ……小出由美子さんだったよな。

由美子さんか……。まだ眠いのかな、何で起こすんだ？

…。

…。

………由美子さん？

！

そうだ！ 思い出した！

俺は昨夜由美子さんと飲んで…ぶっ倒れちまったんだ！

ようやく自分の状況が分かってきた俺は、おもむろに目を開けて、体を起こした。つまり、眠りから覚めた訳だ。

「ああ、やっと目が覚めたみたいね。よかったあ…」

起き上がってみると、俺の横に由美子さんがいた。

「へ？ よかったって、何の事？」

「何だかさっきまですごくうなされてたのよ、柏木君。汗もすごいし、何だか大丈夫かなって心配になったんだから」

そ、そうか。

さっきのあの光景はやっぱり夢だったんだ。

「夢でよかった……」

思わずそんな言葉とため息をもらしてしまふ。

「何か本当にいやな夢だったみたいね…」

「ああ、そりゃもう。…って、これも夢だなんてオチはないよね？」

「それは分からないわよ、胡蝶の夢ってのもあるし」

「冗談じゃないよ…」

と、軽い冗談などを交わしてうちに、俺は自分がどこにいるのか疑問に感じた。

「ところで、ここって？ 俺は昨日飲み屋で倒れたんだよね？」

俺が聞くと、由美子さんは少し恥ずかしそうにしながら、答えてくれた。

「うん、そうなんだけど。あの後しばらくはお店で休ませてもらってたんだけどそのままじゃどうしようもないから…」

「それで？」

「わたしの部屋に…」

そう言われて改めて周囲を確かめると、確かにそこは俺の部屋じゃない。

まぎれもなく、女の人の部屋だった。

「そ、そんなにじろじろ見ないで欲しいな…」

由美子さんはいつそう恥ずかしそうにしている。確かに失礼だった。

「あ、ごめん。でも…」

思ったよりも女の子らしい部屋だった、とは口には出さないが。

俺はこの時、ふと重大な事に気が付いた。

それは、この部屋には俺が今寝ているベッド以外に、布団を敷いた形跡がないと言う事。つまり、俺と由美子さんは一つの布団で寝た事に…。

…何だかさっきの夢のような事態が起こりうるんじゃないか…。唐突にそんな恐ろしい予感がしてきた。

「ん？ どうしたの、柏木君。何か顔色がよくないけど…」

い、いかん。

とにかくここでこのんびりしてる場合じゃない！

急いで自分の部屋に戻らないと、本当に血を見る事になり兼ねない。

「ゆ、由美子さん！ 面倒かけて申し訳ないけど、俺用事があるからもう行くよっ」

多分普段の倍以上の速さでしゃべっていただろう。

「え？」

と、きよとんしてる由美子さんをよそに、俺はさっとベッドから出ると、そのまま玄関へと向かって走り出した。

「…あ、ねえ、あのお店の人がね…」

何やら俺に向かって由美子さんが言ってるようだけど、今は帰る事が先だ。

「ごめん！ この埋め合わせはまた！」

それだけ由美子さんに告げると、俺はわき目も振らずに外へ出て行った。

由美子さんの住んでる場所の地理にはあまり詳しくはないが、おおよその場所は分かったので、とりあえず大通りでタクシーを拾って、俺は自分のアパートへ急いだ。さっきの悪夢が、正夢とならない事を必死に祈りつつ…。

由美子さんのところを出たのが、ほぼ午前九時。

タクシーの中で、ようやく正確な時刻を知ると、俺の不安はいつそうふくれ上がった。行っただ。

「…昨日の夜に何か恐ろしい出来事とかなかったかな？」

「…お客さん、何言ってるの？ そりゃ、救急車の音が止まる事はなかったけど、それも

いつもの事だしねえ…」

「そうか、それならいいんだ…」

やっぱり取り越し苦労だろうか…。

いや、まだ報道されてないだけでも知れない。

「ちょっとラジオつけてくれない？」

念のためと言う事もあるし、どこぞの放送局が速報なんか流してくれるかも知れないからな。

「…いいですよ。チャンネルは？」

「どこでもいい…いや、民放は駄目だな」

やっぱりそのための受信料なのだから、ここは一つあそこに期待しよう。

「…はいはい」

運転手は気の抜けた返事をしながら、ラジオのスイッチを入れた。

そして、車内に流れたのは…何だか歌のような朗読のような…よく分からないが、そんなものだった。

「…詩吟だね。お客さんこんなの興味あるの？」

やけに物知りな運転手だな。それにしても、詩吟とは…。

「いや、全然分からないよ」

当然ながら詩吟と言う言葉は知っても、それがどんな物でどんな意味があるのかなんて、知りはない。だって単にニュース速報が流れてないかと思って、ラジオをつけてもらっただけだ。そうか、単にニュースだけなら、見えるラジオでも持っていればよかった…。

運転手もあきれてる様子で、それ以上俺に話し掛ける事はなかった。

ま、タクシーに乗って、運転手にあれこれと聞かれるのも、逆に気を遣ってしまうだけで、かと言って実のある話がされる訳でもないからな…。

結局、最寄りの駅に着くまでのわずかな時間では、俺の期待…いや、恐れていたニュースは流れなかった。

しかし、どうしてあの夢がこんなになるんだらう？

一、千鶴さんの様子が気になって仕方がないよな。

二、梓ならやりかねないよ、うんうん。

三、楓ちゃんも結構思い込みが激しいタイプだからなあ。

四、初音ちゃんは、ああ見えても怒ると恐いんだぜ？

五、あれは四姉妹が俺に毒電波を送ってたに違いない。

……。

…やっぱり不安だ。

ものすごく、不安。

俺はもしかして、破滅への道をひた走ってるんじゃないか？

うーん…。

このまま、自分の部屋に戻っていいのか？

でも、戻らない事には、話が進まない。

仕方がない…。

すっかり後ろ向きな考えになってしまったが、とりあえず俺は自分の部屋に戻るために電車に乗った。そして、目的の駅に着いた時、俺は改札が出るのが恐かった。

だが、昨日の午後九時に待ち合わせするはずだった改札出口の付近には…四姉妹の姿は見当たらなかった。

まさか隠れてる訳でもないだろうから、ここにはいないと言うのが正解…だと思ふ。とにかく今はアパートまで逃げ…だ。

小走りに駅前を抜けて、アパートへ。大した距離じゃないはずなのに、何となく遠く感じるのは、気のせいなんだろうか？

「やれやれ…やっぱり運動不足だね、こりゃ」

情けない事にアパート前まで来た時、俺の息はかなり上がっていた。こんなのを梓に見られれば「ナマケモノは駄目だね」と言われそうだな。

少し呼吸が落ち着くのを待ってから、俺は自分の部屋へと向かった。

アパート周囲には人影はないが、俺の部屋の近くに誰かがいるかどうかは分からない。と言うのも、俺が今いるところはベランダ側だからで、入り口は正反対だ。

ゆっくりと反対側へと回り、階段を慎重に上って行く。

しかし、自分の部屋に戻るのに、何でこんなにコソコソとしなくちゃいけないんだ？そんな疑問を感じつつ、一步一步進んで行く。

ドクン、ドクン……

さつき呼吸を整えたばかりだと言うのに、俺の心臓は高鳴っていた。

落ち着け、落ち着くんだ、柏木耕…。

足が重い。

手のひらも汗に湿る。

もう少し、もう少しで階段を上り切る。

それを曲がれば…俺の部屋の前に誰がいるのかは、すぐに分かる。

あと三段…。

二段…。

…あと一段を残した位置で、俺の足はびたりと止まってしまった。

と、その時だった。

通路の方で、何か物音がした。

…誰かがいる。

通路に誰かがいる。が、足音はしないから、歩いている訳ではなさそうだ。

さっきよりも激しい鼓動を感じながら、俺は迷っていた。

どうしよう？ もし千鶴さんたちだったら、何て言おう？

「おはよう」じゃ何か間抜けだし。

「お待たせ」じゃ馬鹿みたいだし。

「ごめんなさい」…つてのが、一番いいかな？

ま、梓あたりはギャーギャー言うかも知れないけど、他のみんなは分かってくれるだろう…。

う…。

ええい、ままよ！

最後の一段を踏みしめて通路へと身を出した時、俺はすかさず通路の人影を確認した。

『エルクウ・キラール§1～4』

そして、通路の俺の部屋の前には…

A、千鶴さんだった。

B、梓だった。

C、楓ちゃんだった。

D、初音ちゃんだった。

E、四人ともいた。

F、誰もいなかった。

……さて、どれだと思う？

後書き

『エルクウ・キラール』

原作の終わり方などに一切関係ない、純粋なコメディ作品です。

追加コメント(1999/07/28)

書式統一の改訂です。

1997/-/-/ 初版 a s h

1999/07/28 改訂 a s h

2001/06/24 改訂 a s h

PDF書式変更:2016/05/22